



ニュースレター

第61号

NPO法人 日本リハビリテーション看護学会

事務局案内

住 所 〒162-0825

東京都新宿区神楽坂4-1-1 オザワビル2F

株式会社ワールドプランニング内

NPO法人 日本リハビリテーション看護学会

事務センター

電話番号 03(5206)7431 FAX 03(5206)7757

E-mail jrna@worldpl.jp



< お庭の手作りのハロウィン >



< 盛岡市高松の池の紅葉 >



超高齢社会を迎えて～リハビリテーション看護への期待～

副理事長 板倉 喜子

医療法人白山会 白山リハビリテーション病院

9月に入っても暑い日が続きますが、会員の皆さまはいかがお過ごしでしょうか。今年は平年より遅く梅雨入りし早く梅雨明けしたところが多く、紫陽花やカタツムリが雨のしずくを浴びるような時期はあっという間に過ぎていきました。

さて今年、「2025年問題」という超高齢社会を迎えることで雇用、医療、福祉の分野に大きな影響が出るとされる社会的課題の入り口に到達しました。働く人口の減少と少子高齢化により、医療・看護職の人手不足が進むなか、高齢患者の増加、医療需要の高度化や多様化により入院医療や在宅医療、訪問看護のニーズも急増することが予測されます。

こうした環境の中で、当事者の生活を支えるリハビリテーション看護（以下、リハ看護）の重要性はますます高まっていますが、現場からは人手不足に加えて設備や教育が間に合わないという声も聞かれます。会員の皆さまが働く環境の変化はいかがでしょうか。

また2024年度の診療報酬改定では、入院基本料の施設基準に「身体的拘束を最小化する体制の整備」と「人生の最終段階における適切な意思決定支援の推進」が加わりました。介護施設や在宅においては今年3月に「身体拘束ゼロへの手引き」から「身体拘束廃止・防止の手引き」に見直されました。いずれも「尊厳の保持」と「自立支援」の実現のために必要な取り組みです。リハビリテーションの過程における様々な場面において、患者さん自身の意向を尊重し意思決定を支えること

が重要なことは言うまでもありませんが、その意思決定は状況に応じて変化することも、私たちは幾度となく実践の中で経験しています。患者さんとそのご家族にとって、自ら選択できるよう心身の回復に寄り添い、その人らしい暮らしに向けて多職種と連携し協働する力を活かして環境を整える支援者であることがリハ看護に期待されています。

診療報酬や介護報酬への対策では、次回改定に向けた情報収集や他団体との合同要望の協議を重ねています。どちらも、入院から生活の場におけるリハ看護の実践の有用性に関する情報を集めています。現場の実践がいかに対象者に有用であるか、それがなければ何が困るのかなど、会員の皆さまにはぜひ現場の声を本学会へ届けていただけますようお願いいたします。

昨年度、会員の皆さまにご協力いただいた調査からは、本学会の活動における学習・教育への期待が高いことがわかりました。今年度の研修会では「認知症とせん妄、ユマニチュード」と「その人らしさを支えるICF、退院後の生活支援」をラダー別を実施しました。受講された方やそれ以外の方からも、ぜひ感想や今後の研修会のテーマなどご希望を寄せていただき企画に反映できればと思います。

11月には第37回学術大会が6年ぶりの対面にて金沢で開催されます。リハ看護を大いに語り合う場として、そして能登半島地震からの復興を願う多くの皆さまにお会いできるのを楽しみにしています。



NPO法人日本リハビリテーション看護学会

第37回学術大会開催のご案内

第37回学術大会長
加藤真由美(金沢大学看護科学領域)



メインテーマは、「Go for it! リハビリテーション看護は果敢に挑戦する」です。趣旨は、参加者がリハビリテーション（以下、リハ）看護の専門性についてをあらためて確認し、一般演題から得られたリハ看護師の実践の工夫等や様々な専門家からの知見を、ケア対象者の方々に調整や時には改良して活かしていただくことです。これらの流れは、さらにリハ看護の発展へと循環されます。

会長講演では、あらためてリハ看護の専門性について解説します。排尿・排便ケアの最前線を提示します。生活援助で基本となる食事・栄養・嚥下・口腔ケアについて多職種の視座から工夫した取り組みの紹介をします。回復期での活動と休息のバランスが図られるための活動支援について講演があります。身体拘束はリハの推進の妨げであり回避・解除について、またパーソン・センタード・ケアによるリハ看護についての講演もあります。

リハ看護師は常に思いに寄り添う看護を行っていますが、時には心理面への接近や支援が非常に難しいことがあります。回復期リハ病棟でのアピアランスケアの成果、ファシリティドッグ導入による有効性の可能性、看護師のリハ患者・人々との関わり方のヒントとなる講演を設けています。

近年、自然災害が相次いで発生しています。被災者へのリハ看護に関するシンポジウムに加え、支援する医療者への支援についての講演を設けました。あまり支援する側に関する研究や講演が行われていません。支援する医療者に対して、どのような支援をどのようにする必要があるのか手掛かりが得られます。また、県民公開講座を設け、自身でストレスを緩和する方法について伝授します。

リハ看護学会会員の皆様には、この学術大会にご参加をいただき、交流・情報共有やネットワークづくりの機会にさせていただきたいです。また、にぎやかな大会となり、石川県を元気付けていただきたいと思います。関係者一同、皆様の心よりお待ちしております。

広報委員より
石川は海の幸ご当地グルメ、
伝統文化など見所満載です！
リハ看護の力で元気の輪を
広げましょう

プログラム (予定)

大会長講演

「リハビリテーション看護師のプロフェッショナルリズム」

加藤真由美 (金沢大学)

教育講演

「パーソン・センタード・ケアの視点によるリハビリテーション看護の推進」

鈴木みずえ (浜松医科大学)

「災害支援者への支援」

秋富慎司 (金沢医科大学)

「自信がもてる排便ケア POO マスターからの最新情報」

榊原千秋 (合同会社プラスぼぼぼ)

特別講演

「日常生活を取り戻すためのアピアランスケア」

藤間勝子 (国立がん研究センター中央病院)

「きみといっしょなら ファシリティドッグの寄り添い」

溝部 怜 (聖マリアンナ医科大学)

「リハビリテーション看護と「弱さ」へのまなざし」

宮坂道夫 (新潟大学)

共催セミナー

「心疾患マネジメントに果敢に挑戦する回復期リハ看護

～正しくリスクとベネフィットを知り Exercise Is Medicine を実践するために」

勝木達夫 (やわたメディカルセンター)

シンポジウム

「リハビリテーション看護における身体拘束最小化」

「食事・栄養・嚥下・口腔ケア」

「災害リハビリテーション看護」等を予定しています。

ワークショップ

「自信が持てるおむつケア "WOCとおむつフITTERのコラボレーション"」

その他、公開講座、一般演題、学会企画、等です。

会場 (石川県地場産業振興センター)

※変更等は、随時、大会ホームページに掲載します。

< 周辺地図 >





リハビリテーション・ケア合同研究大会 2025 企画案内

リハビリテーション看護学会 理事
脳卒中リハビリテーション看護認定看護師 新林 正子

2025年11月22日に開催されるリハビリテーション・ケア合同研究大会にて、当学会主催のシンポジウム「看護師が動く・チームが動く ―患者の描く未来を支えるリハビリテーション看護―」を企画しました。

リハビリテーション看護は、患者が身体的、精神的、社会的に自立できるよう支援し、その生活の質を向上または再構築することを目的としています。この過程で、看護師は患者や家族と協力し、医療チームとともに目指すべき目標を設定し、その意思決定を共有することが求められます。特に、患者の思いや願いを聴き、チーム全体でその実現に向けて支援することが重要であり、これを実現するための方法の一つが「人生会議」として知られるACPです。しかし、現場では、ACPが「人生の終末期」と結びつけられがちで、その正しい理解が広がっていないという課題もあります。

シンポジウムでは、リハビリテーション看護とACPの二つの実践をどのように統合し、患者中心のケアを提供できるかについて議論します。演者には、実践現場での経験を持つ専門家が登壇します。医療法人社団朋和会西広島リハビリテーション病院の坂野ゆかり先生がリハビリテーション看護の実践と課題を共有し、神奈川県総合リハビリテーション事業団の小泉千秋先生が地域リハビリテーションの視点からアプローチを紹介します。さらに、富山大学の河合皓太先生が医師の立場からリハビリテーション看護とACPの統合について述べます。

このシンポジウムは、患者中心のケアを実現するための新しいアプローチを模索する場であり、参加者が実践的な知見を得ることができる貴重な機会です。皆様の参加を心よりお待ちしております。



広報委員より
動いてなんぼ、
笑いと食いだおれの大阪に、
リハケアで集結!

委員会活動報告 (学会誌編集委員会)

学会誌編集委員会 委員長 山本恵子

5人に1人が高齢者といわれる『2025年問題』の年を迎えました。活動報告としての初めの言葉としては不適切?!と思われたかもしれませんが、元気な老後をそして、元気に年を重ねるためのヒントがこの学会誌にはあると考えます。当委員会の活動は、図に示したように、会員の皆様の活動をまとめたものです。それぞれの活動や伝えたい事柄に合わせてご投稿いただければと思います。平常時から発症・治療・回復期そして、災害時など多様な状況に応じたリハビリテーション看護を紹介したいと考えております。例えば、コロナ禍では感染対策、第14巻では災害について特集を掲載しております。ご自身の施設や病院では当たり前だと思っていられることも実は他施設の参考になることも沢山あります。ハードルが高いのではといった質問も受けますが、皆様の取り組みをよりよくお伝えするために査読の先生方とも協力し、投稿論文をより良いものにしようと努力しています。

新たな取り組みとして『会員の声』は、自薦他薦を問わない原稿募集を第14巻から導入しました。会員の声そして活動報告など、是非ともご投稿をお待ちしております。

広報委員より
なるほど～学会誌のこと
分かりました

！学会誌編集委員会が目指すところ

学会誌：情報共有・発信の場
新たなケアの共有
リハ看護の伝承
会員の皆様と共に…

皆様の投稿
お待ちしております





施設紹介

地方独立行政法人 広島市立病院機構

広島市立リハビリテーション病院

看護師長 杉岡 真紀子



自施設のある広島県は、平和都市としての世界的な知名度だけではなく、海・山・川などに恵まれた自然環境とプロのオーケストラをはじめとする文化・野球、サッカーなどのプロスポーツ活動が盛んな都市です。また、お好み焼きや瀬戸の恵みによる食文化など多彩な魅力と活力に満ちあふれ、おおらかで新しいものを取り入れる気性を持つ行動派が多い県民性と言われています。そのような広島県の中心部からやや県北に位置しているのが、広島市立リハビリテーション病院です。

自施設は、2008年4月に開設した100床の回復期リハビリテーション（以下、リハビリ）病院です。広島県保険医療計画において、専門性の高いリハビリ医療による機能向上と、地域完結型医療を支える継続的リハビリ医療の提供を責務とし、日々、新たな試みに挑戦し続けています。少子超高齢社会の伸展による地域包括ケアシステムが推進される中、自施設の入院患者は、認知症をもつ高齢患者はもちろん、多種多様な慢性疾患のある医療依存度の高い患者が増加傾向です。また、多様な価値観を持つ患者の意思決定支援と中途障害を持つ患者の「その人らしい生活」を再構築していくためには、セラピストによる1日平均8.6単位の専門性の高いリハビリの提供はもちろんですが、入院生活における看護実践が大きな鍵になると考えています。そのため、患者・家族とともにリハビリを実践するだけではなく、認知症ケアチーム・排尿自立支援チームなどのより専門性の高い医療が提供できる体制を構築し活動を行っています。

退院前訪問では、患者・家族、自施設の職員はもちろん、在宅サービス提供者とともに具体的な福祉用具の選定や住宅改修の調整を行い、より良い環境で住み慣れた地域で生活をしていただけるように支援を行っています。また、医療保険での外来リハビリや失語症を持つ方を対象とした通所リハビリを展開し、様々な継続的リハビリを地域に提供しています。

これらの取り組みは、開設時から実践していたわけではありません。職員一丸となり、より良いリハビリ医療を推進していく中で、入院された患者・家族、地域の方々から学びを深める機会をいただき、一緒に作り上げてきた病院であると自負しています。これからも皆さんに育てていただきながら「いっぱい」（自施設の広報誌の表題です）邁進していきます。

編集後記

近年、回復期リハビリテーション病棟に入院される患者様の重症割合が増加しています。毎日がめまぐるしく過ぎていく中、自宅の玄関で穏やかに出迎えてくれるのは、近くの川原で摘み取った野草です。普段は見向きもしない草花が癒しに大きく貢献してくれています。

医療法人財団尚温会 伊予病院 大塚恵



＜クローバー＞
(シロツメクサ)

花言葉：幸福・私を思って



＜ヒナゲシ＞

花言葉：いたわり・慰め